



映画「コンクラーベ」 — おやっと思ったこと —

家人や友人に薦められて、夏休みに映画を観ました。米英合作の「コンクラーベ」。もつとも、Prime Video で。コンクラーベとは、世界のカトリック教会の頂点に座るローマ教皇を選ぶ会議のこと。奇しくもローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が遷化され、映画の公開がバチカンの実際の教皇選挙と重なったり、何でも会議に出席する日本の枢機卿が飛行機の中でご覧になったというニュースもあったり、その評判をご存知の方も多いと思います。

何時も一朝一夕には決まらないことから、昔から「根比べ」とも揶揄されるとか。その話ですから、あからさまに言ってしまうと、権謀術数だって渦巻く、かなりのスリラー仕立てになっているので、中身を紹介するのは御法度というものでしょう。でも、一カ所、おやっと思ったことがあったのです。

それは、このコンクラーベを取り仕切る首席枢機卿が世界各地から集まった枢機卿の前でいよいよ開会を宣言するという、この映画の主張がよく表れている重要な演説の場面なのです。『新約聖書』の「マタイ伝」や「マルコ伝」に出てくる、イエスが十字架上で最後に叫んだという「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」を引用しながら、こう語るのです。「私は教会に長年お仕えしてきて、何より恐れるようになった罪が1つあります。『確信』(certainty) です。確信は一致を阻む敵であり、寛容の大敵でもあります。キリストでさえ最後に…『神よ、なぜ私をお見捨てに？』、確信を持って十字架の上で叫びました。信仰は生き物です。疑念と手を取り合い歩むものだ。もし確信だけで疑念を抱かねば、不可思議は消え、信仰は必要なくなる。私達が求めるのは疑念を抱く教皇です」。

確かに、この台詞は、私のような俗人には真実味をもって聞こえて来ます。事実、私も学生時代、そんな風に解釈していました。「『エリ、エリ、ラマサバクタニ』は事実上キリストの悲鳴に過ぎない。しかしキリストはこの悲鳴の為に一層我々に近づいたのである」。この芥川龍之介さんの『西方の人』の文章に感激した時期もありました。

しかし、大学を卒業し、それから少し経った頃、遠藤周作さんが『イエスの生涯』を発表し、「この冒頭の短い句だけからイエスの心理を考えるのは不十分なのだ」、「イエスが息を引きとる直前の有名な言葉 — 中略 — は詩篇 22 篇にあるもので」と、『旧約聖書』の「詩篇」の 22 篇から 31 篇にかけての印象的な流れを紹介していたのです。実際、「詩篇」を紐解いてみれば、その流れは、「わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか」から始ま

り、「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共に
におられるからです」を経て、「わたしは、わが魂をみ手にゆだねます。主、まことの神よ、
あなたがわたしをあがなわれました」へと続きます。

そして、注目すべきは、末尾の「詩篇」31篇の句こそ『新約聖書』の「ルカ伝」が紹介
する十字架上のイエスの最後の言葉にそのまま符号するのです。「そのとき、イエスは声高
く叫んで言われた、『父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます』。とすると、マタイ、マルコ、
ルカによる福音書、即ち『新約聖書』が伝えるイエスの心は、決して絶望や疑念ではない、
遠藤さんの言う通り「おそらく十字架上で人々に語る余力を失われてからイエスの朦朧と
した意識のなかでは詩篇の一つ一つの祈りが浮かんでいたのであろう」ということになる。
つまり、「福音書」は、イエスが十字架の上においてなお揺るぎなく神と信仰への確信を持
ち続けていたことを物語っていることになる。

同じキリスト教国であっても、個人倫理に依存する傾向が強いプロテスタント系のアメ
リカや独自の国教会を持つイギリスの映画ということもあるかも知れませんが、教皇もまた
人間である以上、自分の確信に疑いを抱く謙虚さを持ってほしい、そう言いたいのはよく解
ります。しかし、カトリックの総本山バチカンの首席枢機卿ともあろう人に、神のひとり子
イエスが神への不信、信仰への疑念を抱いた、そう語らせてしまって本当にいいのだろうか、
私が、おやっと思ったのは、この一瞬の、しかし見過ごすことの出来ない一事なのです。

※『新約聖書』とは、主としてイエス・キリストの生涯について、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人の
伝記作家が記述したもの。イエスの生涯と言葉を信仰するキリスト教の典拠とされる正典。なお、「ヨハ
ネ伝」には、本文に直接触れる記述はない。

※※『旧約聖書』とは、イエス・キリスト誕生の遥か以前からユダヤ民族によって書き継がれ、ユダヤ教に
よって正典化されていった書物。従って、当然イエス時代の聖書とは、『旧約聖書』のこと。

[>前のページへ戻る](#)